

2005年5月3日 中日新聞

脳科学研究とロボット技術への応用



国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所長

川人 光男氏

小脳の働きを説明する理論モデルを作り、人間の動作を見てまねる世界初の自己学習型ロボットを開発。小脳が運動制御ばかりでなく、認知や学習、記憶といった機能にも一定の役割を果たしていることを解明した。人間らしい動きを追求したロボット研究で、世界の最先端を走る。

「人間の心を科学的に解明するには、脳の複雑な情報処理の独創性は、海外も注目。「ネ仕組みを研究者自身が解いてみ

「人間の心を科学的に解明するには、脳の複雑な情報処理の独創性は、海外も注目。「ネ

イチャー」など世界の一流科学

誌に掲載された論文は既に百二十編以上、国際招待講演は百回を超える。

少年時代は「本の虫」だった。父親に買ってもらった文学書を読みあさり「想像力がたくましくなった」。東大で物理学を専攻したが「本当におもしろいのは人の心」と興味は脳へ。大阪大大学院で脳科学に没頭、研究者の道に進んだ。

既成の学問体系の中や方法論で業績を目指すタイプではない。「自分の前には道はないけれど、自分の後ろに道ができる」という研究者であり続けたい」という。

科学の世界は日進月歩だ。特殊な装置で脳活動を分析すれば「人が何に注意を向けているか、心の中を読める時代になってきた」。今後「脳活動を直接読み取り、人が考えただけでロボットに命令したり、情報通信端末を操作できる技術を開発したい」と思いは熱い。

富山県高岡市出身。五十一歳。京都府精華町光台。（京都支局・梅溪郁雄）

人間らしい動きを追求

富山県高岡市出身。五十一

歳。京都府精華町光台。（京都支局・梅溪郁雄）

中日新聞社より使用許諾済（転載厳禁）